



播種の深さや、水田の水深管理、播種時期の調整など、加害する鳥の種類や作物に応じた作付けの工夫により、鳥による被害を受けにくくすることも重要な対策である。

▶ 1. 水稻直播栽培における管理

稲作の省力化、コスト低減を図る方法として直播栽培があり、全国で栽培面積が増加している。ただし、苗を移植する慣行栽培に比べ、種子を直接播くため、乾田直播ではスズメ、ハトによる被害、湛水直播ではカルガモ、カラスによる被害が発生しやすい。

湛水直播における管理のポイントとしては、水田を平らにならすことが、播種後の速やかな排水、斉一な落水状態、均一な播種深度を確保する上で重要である。水田に凹凸があると落水後も凹部に水が残ってしまい、田面の水を手がかりにカルガモが飛来することが多い。

種子の深さも重要で、生育に支障のない範囲でなるべく深く播種することで鳥類による被害が軽減できる。散播する場合は、種子を加重して土中に播種できるように酸素発生剤コーティング処理等をあらかじめ行う。種子が表面に見えていると鳥に見つかりやすく被害が甚大になることがある。

カルガモ対策には、被害が最も大きい播種直後から出芽期の間（およそ10～14日間）は落水して、田面を硬化させるとよい。落水期間中、スズメやハトの食害がみられる場合は、湛水処理してこれらの被害を防ぐなど、加害種を見極めて対策をとる必要がある。

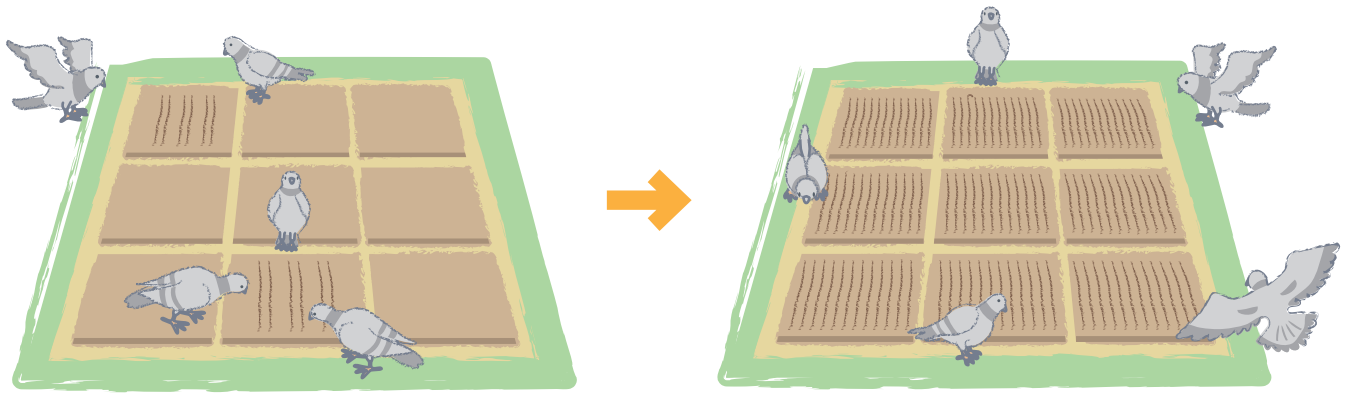
▶ 2. 種子を深く確実に播く

カラスやハト、カワラヒワなどによる播種期の被害対策には、種子を深く確実に播くことが重要である。例えば、とうもろこしの出芽苗の被害は、まだ十分に根を張っていない幼苗が引き抜かれて、種子が食べられるために発生する。そこで、種子を深く播くと、苗が地上に現れるまでに十分根付くことができるため、被害を軽減することができる。播種期のとうもろこしでは、6～9cmの深播きにより、カラスなどによる被害を軽減することができる。どの作物でも、播種後の圃場に覆土が不十分な部分やこぼれた種子があると、鳥に見つかりやすくなるので、確実に播種することが大切である。ただし、播種深度が深過ぎると、圃場の土質や水はけによって、発芽やその後の生長に影響を及ぼすことがあるので注意が必要である。

▶ 3. 一斉播種、収穫時期を揃える

ある地域に生息する鳥の個体数は短期間ではほぼ一定で、大きく増減することはないと考えられる。その場合には鳥による被害もほぼ一定と考えられるので、大面積に一斉に播種したり、収穫時期を揃えたりすることで、被害が分散して単位面積当たりの被害量を減らすことができる。播種期的大豆や小豆などへのハトによる被害対策には有効である。水稻では、直播を行う面積が少ないと被害を受けやすいし、小面積に早生品種を作ると収穫期に被害が集中するので、同じ作物を扱う近隣の農家同士が時期を合わせて一斉に広域で播種を行うなど、地域単位で取り組むことが重要である。

図3-4 大面積で一斉に播種・収穫



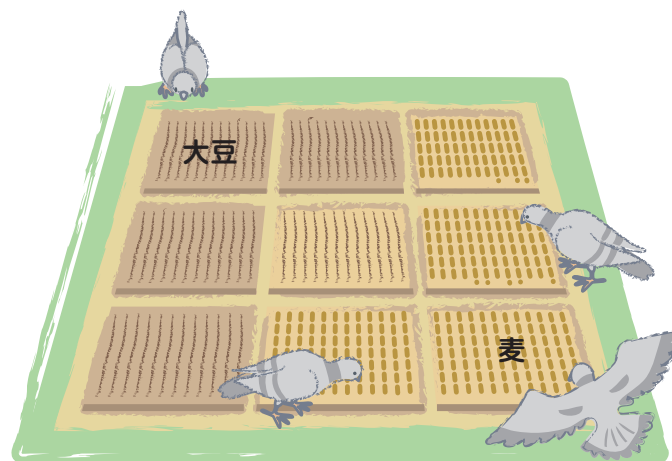
隣り合う圃場で時期が異なると被害が集中する

時期を合わせると被害が分散する

▶ 4. 複数作物で行う収穫時期と播種時期の工夫

鳥は地域内にある餌を、その質と量に応じて選択している。そこで、他の餌が存在する時期に合わせて播種を行うことで、被害の軽減をはかることができる。麦の刈り取り直後に大豆を播種すると、ハトは収穫後のこぼれ麦のほうを好むため大豆へのハトの被害を減らせる。水稻の乾田直播では、大麦の乳熟期に播種することで、スズメによる被害を軽減できる。

図3-5 他の餌が存在する時期に合わせて播種



麦の刈り取り直後に大豆を播種し被害を軽減する

▶ 5. カモフラージュ

大豆の播種期にはハトによる被害が発生しやすい。ハトは地上で展開する子葉を食害するが、子葉の展開が進むほど、大豆の生長への影響は小さくなる。このことから、播種後に地面をわらなどで覆って出芽した大豆をハトから隠し、子葉が十分に展開してから、わらの上に出てくるようにする対策がある。わらの量は地面が見える程度でも効果がある。